

線刻鉄鏃の系譜

The Lineage of Line-Engraved Iron Arrowheads

鈴木一有

SUZUKI Kazunao

はじめに

①認識の経緯と研究史

②線刻の種類と技術

③線刻の系譜

④線刻鉄鏃の象徴性

⑤結語

【論文要旨】

マロ塚古墳から出土した線刻を施した鉄鏃（線刻鉄鏃）の製作地と線刻鉄鏃が副葬品に含まれる意義を探るため、古墳時代の線刻鉄鏃を集成し、その分布と変遷の傾向を整理した。鉄鏃に施された線刻は、大きく、1本の直線のみがみられる直線文と、中央の点とその周りの円形模様で構成される円文に分けられる。これらの線刻を施す鉄鏃は、儀仗性が強い点で互いに関連がみられるものの、それぞれ祖形とする鉄鏃が異なり、製作時期や分布にも差がみられる。

直線文をもつ線刻鉄鏃は、弥生時代後期に北部九州において出現した透孔鉄鏃に起源をもち、古墳時代中期の宮崎県域（南九州）において集中的にみられる。1本の線刻は、透孔の退化形態と捉えた。直線文をもつ線刻鉄鏃は圭頭式にはほぼ限定でき、広域に流通しない。この線刻鉄鏃は、地下式横穴墓といった特定墓制との関連の中で発達した地域的習俗の一つとみなし、地域内で生産され、地域内で消費されたものと評価した。

いっぽう、円文をもつ線刻鉄鏃は、古墳時代中期の事例が多いものの、すでに古墳時代前期初頭に出現している。弥生時代後期の小孔をもつ鉄鏃との関連も考慮されるが、儀仗性が高い鉄鏃に施される傾向が認められることから、円文は特殊性を際立たせる細工と捉えた。円文をもつ線刻鉄鏃は、圭頭式をはじめ、定角式、柳葉式、二段逆刺鉄鏃など、多様性が認められた。分布の中核が見出せず、朝鮮半島を含め広域に分布している。円文は、倭王権中枢と関連が強い鉄鏃に施されているいっぽうで、地域性が顕著な鉄鏃にもみられる。円文を施す技術や意味が、倭王権にとどまらず、多地域に拡散している可能性がうかがえた。

マロ塚古墳例の確認によって、直線文をもつ線刻鉄鏃の分布が宮崎県内にとどまらず、熊本県域まで広がることになった。直線文をもつ線刻鉄鏃を用いることに、地域的な紐帯が読み取れる。熊本県域の有力首長層の副葬品に、宮崎県域との関連を示す儀礼用具が含まれることに、被葬者の性格の一端が示されていると評価した。

【キーワード】マロ塚古墳、線刻鉄鏃、儀仗性、地域間交流、5世紀

はじめに

熊本県マロ塚古墳出土遺物には線刻が施された圭頭式鉄鍬が2点知られる。後述するように、線刻をもつ鉄鍬（以下、「線刻鉄鍬」とする）は、宮崎県域（南九州）において比較的多くの事例が出土している。マロ塚古墳例は、線刻鉄鍬の主要分布域の外側において出土する稀有な事例である。また、線刻鉄鍬には、マロ塚古墳例とは異なる円形の図像もみられ、それぞれ対照的な分布の傾向をみせる。

本稿では、線刻鉄鍬の種類と系譜について整理した上で、線刻模様を施す意味について検討を加え、マロ塚古墳出土例の意義について考えてみたい。

①……………認識の経緯と研究史

線刻がある鉄鍬や銅鍬は、すでに1900年代から知られていた。1905年に石川県長坂二子塚古墳から出土した銅鍬は、表面に円形の模様が刻まれたもので、1908年には皇室博物館（当時）に収蔵され、その存在が広く知られるようになっていた〔小嶋1978〕。1927年には、奈良県円照寺墓山1号墳から円形の線刻をもつ鉄鍬が出土し（図1）、末永雅雄によってまとめられた報告書の中で、長坂二子塚古墳例との共通性が言及されている〔末永1930：p.71〕。しかし、その後しばらくの間、良好な出土例が増加しなかったこともあり、線刻をもつ矢鍬の存在は研究者の注意を引くことが無かった。

その後、1980年代の後半から1990年代にかけて、宮崎県内で線刻鉄鍬があいついで出土し、にわかにはその存在が脚光をあびることになる。とくに、1987年から1988年に発掘調査が実施された宮崎県立切地式横穴墓群〔面高ほか1991〕からは、遺存状態が良好な線刻鉄鍬が集中して出土し、線刻鉄鍬の研究上、大きな契機となった。立切横穴墓群出土資料は、保存処理を担当した戸高眞知子により、その詳細が報告され〔戸高1989a〕、その他の宮崎県内の線刻鉄鍬についても追跡調査がなされた。戸高は、線刻鉄鍬の類例を集め線刻の種類を分類すると共に、線刻を施す意味について、

①製作者を示す、②使用者（集団）を示す、③ある特定の用途を示す、④呪術的意味を持つ、などの解釈を示した〔戸高1989b〕。

戸高による線刻鉄鍬の紹介を経て、鈴木勉により、線刻鉄鍬の彫刻技術にかかわる観察がなされた。鈴木は観察によって、宮崎県内の線刻鉄鍬にみられる直線模様、円形模様、点模様は、それぞれに専用工具（鑿）を用いていたことが想定された。直線模様を施す技術は、専門的な水準は比較的低いと評価されたが、円形模様を施した工具は、曲線を表現するための専用工具（円弧状なめくり鑿）を用いていることから、専門的な彫刻技術者の存在が指摘された〔鈴木2006〕。

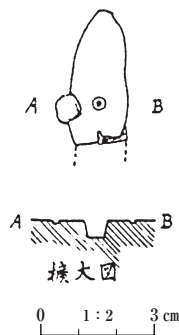


図1 初期の報告例
円照寺墓山1号墳

1990年代以降、線刻鉄鍬は宮崎県外でも確認され、その帰属時期も従来認識されていた古墳時代中期より前におよぶことが確実に became. 古墳時代

前期にさかのぼる愛媛県朝日谷2号墳例〔梅木編1998, 梅木・村上2001, 梅木2002〕や, 朝鮮半島南部で確認された咸安道項里(文)48号墳例〔国立昌原文化財研究所2000〕などが注目できる。ただし, こうした新出例は, 個別に線刻鉄鏃の存在を確認するにとどまっている。現状では, 線刻鉄鏃についての総合的な整理や評価はなされていないといえよう。

②……………線刻の種類と技術

線刻の種類 線刻鉄鏃は製作時期や出土地に違いがみられるが, 表面に施された模様は, 概ね以下の3種類に分類できる〔戸高1989a〕。

直線文 1本の直線のみがみられるもの

交差文 数本の直線で構成されるもの

円文 中央の点とその周りの円形模様で構成されるもの

このうち, 交差文は直線文が組み合ったもので, 施文方法は直線文と同一である。交差文は宮崎県立切60号地下式横穴墓例〔面高ほか1991〕に知られる程度で, 線刻鉄鏃の一般的な模様とはいえない。線刻鉄鏃にみられる模様の主流は直線文と円文の2種といえる。⁽¹⁾なお, 宮崎県新田場7号地下式横穴墓例〔面高・長津1991〕のように, 直線文と円文が組み合う事例も知られている。

線刻の位置 線刻が施される位置は, 鉄鏃の中軸上である場合と, 側辺に近い場合がある。直線文は中軸上にみられる場合がほとんどである。また, 直線文は鏃身部でも茎に近い位置に施される傾向が強い。

円文は中軸上もしくは側辺に偏った位置にみられる。円文が側辺に偏った位置に見られる場合, 多くは左右対称に模様が施されている。遺存状態が悪いため観察できないものがあるが, ほとんどの事例が中軸上, もしくは左右対称の位置に円文があると判断できる。円文は, 鏃身部の切先に近い部分から, 茎に近い部分まで施された事例が知られ, 設定位置は直線文と比べると広範囲といえる。

遺存状態が良好な個体をみると, 線刻は両面にみられることが多い。とくに, 筆者が実見した南九州の線刻鉄鏃にかんしては, 遺存状態が良好な個体のすべてにおいて, 両面に線刻が確認できた。古墳時代前期にさかのぼる愛媛県朝日谷2号墳例においても, 円文は両面に認められる。以上のことから, 線刻鉄鏃は, 両面に模様が施されることが一般的であると判断できる。

線刻の技術 本稿で検討する鉄鏃に施された線刻模様は, 鍛造や鑄造の過程でつくりだされたものではなく, 製品の完成後に鑿などの工具を用いて刻まれたものである。「線刻」と表現する所以である。なお, 線刻模様は研究者によって, 「刻印」と表現されることもあるが, 特定の意味, 意義を含意する「刻印」という表現より, 形態的特徴を指し示す「線刻」という名称のほうがふさわしいと考える。

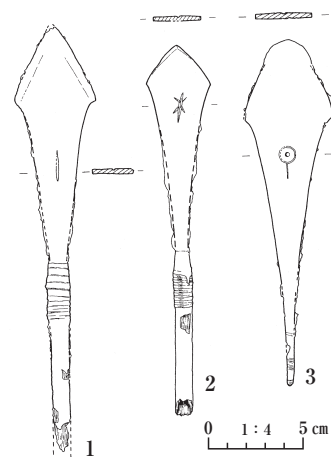


図2 線刻鉄鏃の諸例

直線文:1 交差文:2 円文:3
1. 立切3号地下式横穴墓 2. 立切60号地下式横穴墓 3. 新田場7号地下式横穴墓

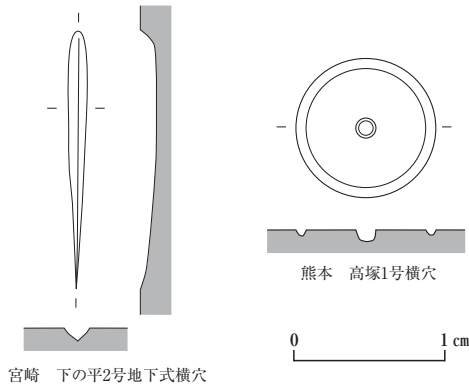


図3 線刻の詳細

あったと想定する鈴木の見解が支持できる。先端が円弧を描く鑿を回転させながら、数回にわたり表面に打ち付けることによって、円形の模様は刻まれたものと考えられよう。また、円文の中心にみられる点の模様についても、鈴木の指摘どおり、先端が細い丸鑿を用いていたと捉えてよい〔鈴木 2006〕。

以上のとおり、線刻鉄鏝にみる模様は、先端形状が異なる鑿を鉄鏝表面に打ち付けて刻みだしたものと捉えられる。これらは、切削線彫りや、蹴り彫りなどとは異なり、工具の先端を金属の表面に打ち付けるだけの比較的簡易な彫刻技術といえる。先端が円弧を描く鑿（円弧状なめくり鑿）は模様を彫刻するための専用工具であった可能性があるが〔鈴木 2006〕、直線模様を刻む際に用いたと想定できる鑿は、鉄鏝製作のためにも必要な工具である。基本的に、線刻鉄鏝を製作する技術は、通常の鉄鏝加工の延長上にあるものといえ、専門の彫金技術を駆使したものではないと判断できる。

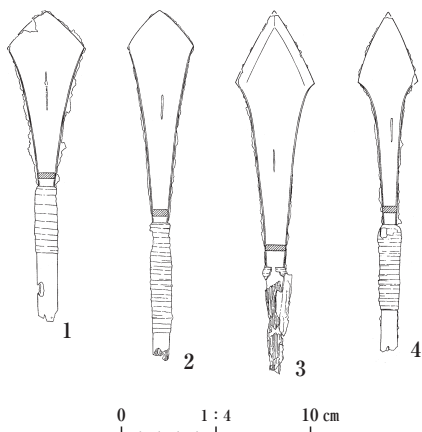


図4 圭頭式鉄鏝の諸例

圭頭式鉄鏝A類：1・2 圭頭式鉄鏝B類：3・4
1. 新田場7号地下式横穴墓 2. 立切6号地下式横穴墓
3. 須木上ノ原9号地下式横穴墓 4. 大萩15号地下式横穴墓

鈴木勉が指摘するように、遺存状態がよい線刻部分の詳細を観察すると、直線文や交差文については、刻みの中央部が太く深く、両端は細く浅くなっている状態が確認できる。これは、先端が扁平な鑿（なめくり鑿）を用いて、鉄鏝の表面に傷を入れたものと捉えられる。いっぽう、円文についても、細かな列点の連続ではなく、なめらかな曲線によって表現されている。ただし、同一個体における円文の直径は、模様ごとに微妙に異なることから、円形の彫刻を施した工具は、先端が円形を呈するものではなく、先端が円弧を描く鑿（円弧状なめくり鑿）で

③……………線刻の系譜

鏝身形態 直線文と円文について、その変遷と系譜関係について検討しておこう。線刻鉄鏝の主流をなす直線文と円文は、それぞれ特定の鏝身形態と関連がある。直線文が施された線刻鉄鏝は、圭頭式鉄鏝との強い関連がみられ、後述するように、宮崎県域に分布の中心がある。宮崎県以外の出土例としては熊本県マロ塚古墳例が知られる程度である。線刻鉄鏝は鹿児島県内をはじめ近隣地域で確認される可能性があるが、直線文が施された線刻鉄鏝の出土地の傾向は、今後も大きな変更はないであろう。

九州においては、圭頭式鉄鏝が盛んに用いられ、鉄鏝組成の地域性が認識できる〔杉山 1988〕。とく

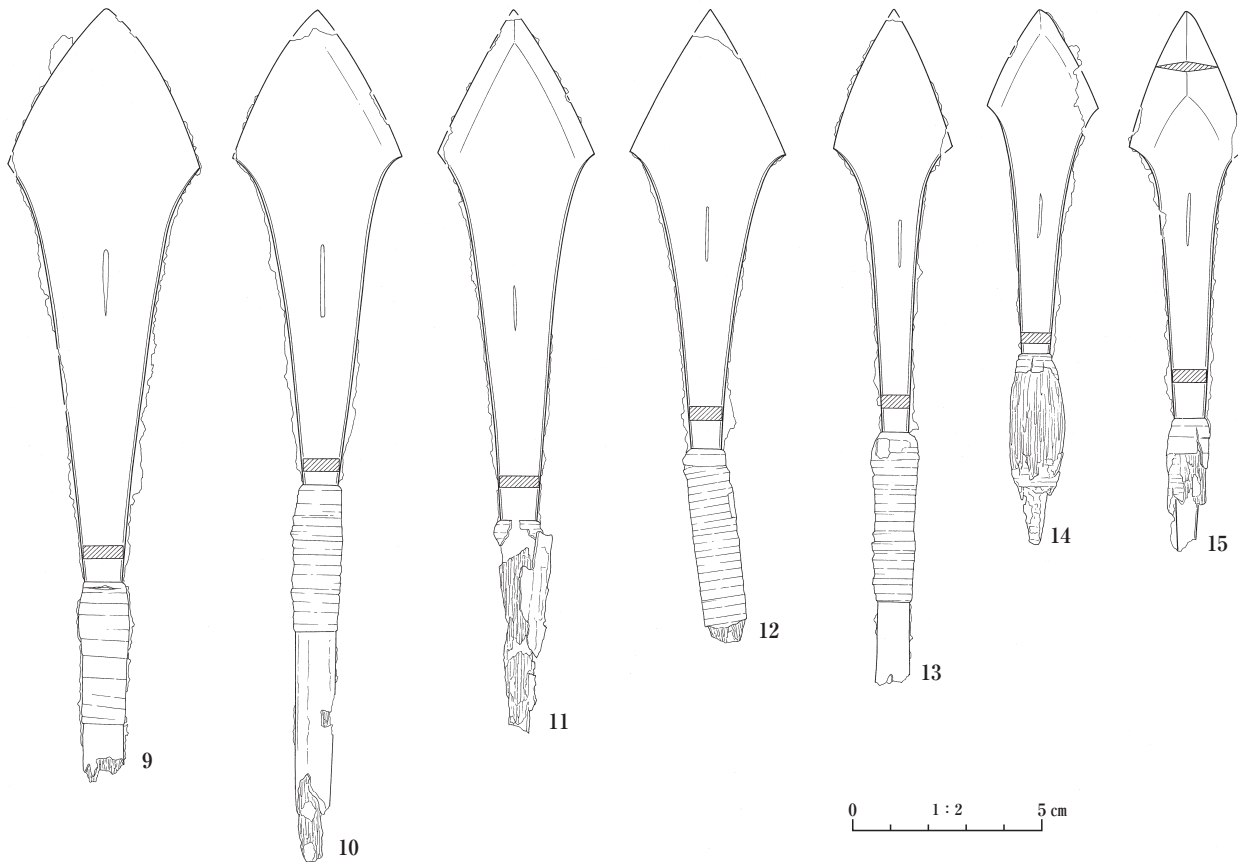
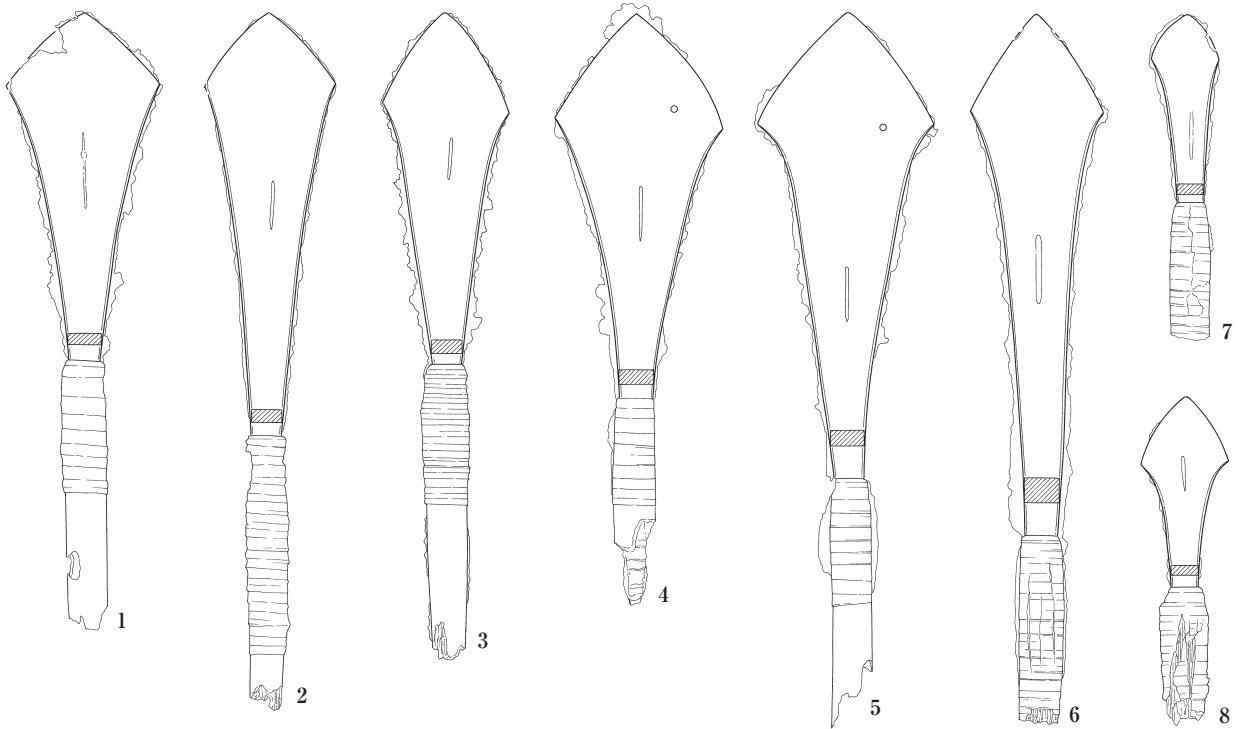


図5 直線文をもつ線刻鉄鏃の諸例

1. 新田場7号 2. 立切6号 3. 牧ノ原17号 4・5. 旭台9号 6. 菓子野2号 7. 旭台13号
 8・10. 立切3号 9. 下の平2号 11・14. 須木上ノ原9号 12. 大萩10号 13. 大萩15号 15. 大萩27号

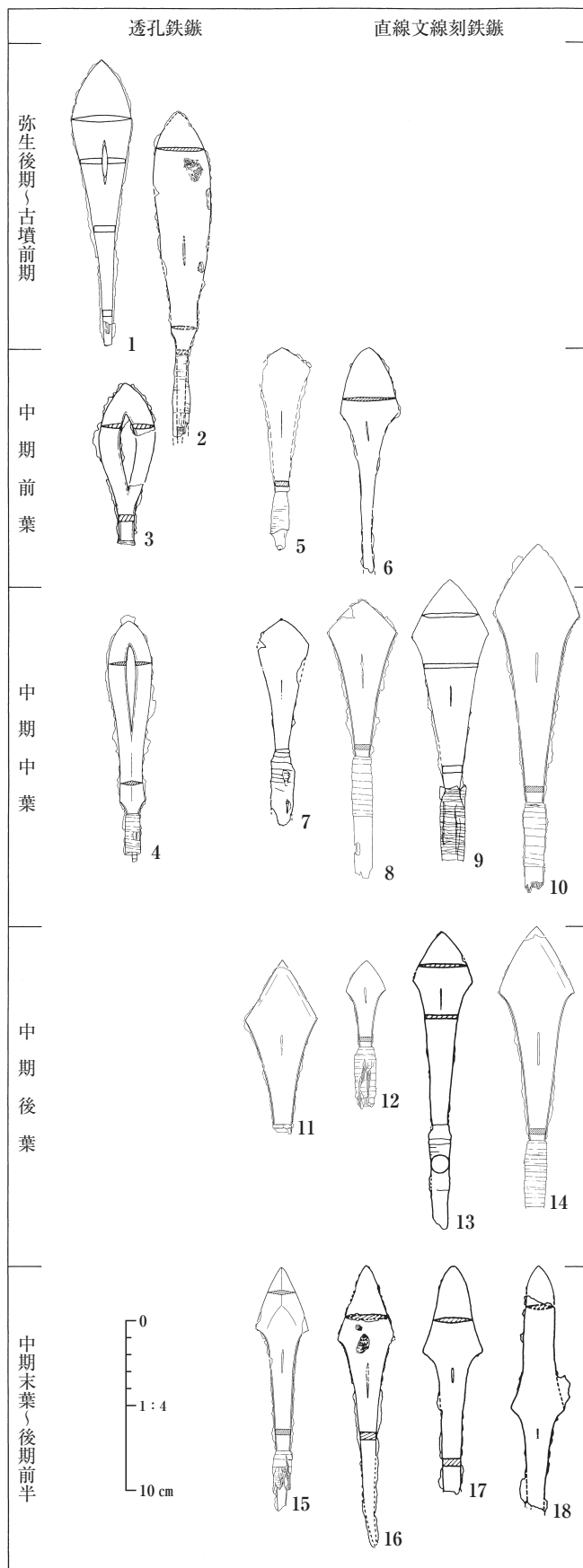


図6 直線文をもつ線刻鉄鍬の変遷

に宮崎県域では、圭頭式鉄鍬への志向が極めて強く、鍬身関が突出する独特の形態の圭頭式鉄鍬が知られている。突出した鍬身関をもつ圭頭式鉄鍬は、北部九州もしくはそれ以東ではみられず、宮崎県域独自の形態といえる。ここでは、西日本で広域に認められる通有の圭頭式鉄鍬(図6-7~11)を「圭頭式鉄鍬A類」とし、宮崎県内で主にみられる突出する鍬身関をもつ圭頭式鉄鍬(図6-12~16)を「圭頭式鉄鍬B類」と呼び、⁽²⁾ 区別しておきたい。地域性が明確な圭頭式鉄鍬B類は、和田理啓が整理したように[和田2001]、古墳時代中期中葉以降に出現し、宮崎県内では、それ以前から存在した圭頭式鉄A類を出土量で凌駕するようになる。直線文をもつ線刻鉄鍬は、圭頭式鉄鍬A類とB類の双方に認められるが、地域性が強い圭頭式鉄鍬B類の比率が高い。表1に示すように、直線文をもつ線刻鉄鍬は、地下式横穴墓からの出土例が圧倒的多数を占めている。直線文をもつ線刻鉄鍬の使用は、地下式横穴墓といった特定墓制との関連の中で発達した地域的習俗の一つとみなすことも許されよう。

いっぽう、円文は、圭頭式鉄鍬のほかに、定角式鉄鍬(愛媛県朝日谷2号墳例, 図7-3)、柳葉式鉄鍬(奈良県円照寺墓山1号墳例, 図7-9)、二段逆刺鉄鍬(宮崎県南方14号墳例, 図7-6)、大型透孔鉄鍬(熊本県高塚1号横穴墓例, 図7-10)、大型定角式鉄鍬(咸安道項里〈文〉48

表1 線刻鉄鏃一覧

| 古墳・遺跡名 | | | 鏃身形式 | 線刻の詳細 | 数量の詳細 | 挿図番号 | 文献 |
|--------|------|---------------|----------|-------|----------|------------|------------------|
| 石川県 | 金沢市 | 長坂二子塚古墳(銅鏃) | 大型定角 | ◎×5 | 2本1組 | 7-4 | [小嶋1978] |
| | | | 大型定角 | ◎×5 | | | |
| 奈良県 | 奈良市 | 円照寺墓山1号墳 | 柳葉 | ◎ | | 7-9 | [末永1930] |
| 兵庫県 | 朝来市 | 茶すり山古墳(第1主体) | 柳葉(二段逆刺) | ◎ | 4本以上 | | [岸本編2010] |
| 愛媛県 | 松山市 | 朝日谷2号墳 | 圭頭(定角) | ◎ | 同種多数 | 7-3 | [梅本2002] |
| 熊本県 | 植木町か | マロ塚古墳 | 圭頭(A) | | 2本1組 | 6-11 | [上野・杉井編2012] |
| | | | 圭頭(A) | | | | |
| 熊本県 | 高森町 | 高塚1号横穴墓 | 変形柳葉(透孔) | ◎×8 | | 7-10 | [野田1989, 鈴木2003] |
| 宮崎県 | 延岡市 | 南方14号墳 | 柳葉(二段逆刺) | ◎ | 同種多数 | 7-6 | [茂山1980] |
| 宮崎県 | 高千穂町 | 春姫登横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組 | 6-16 | [田尻・永友1989] |
| | | | 圭頭(B) | | | | |
| 宮崎県 | えびの市 | 島内55号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | | [中野2001] |
| 宮崎県 | 小林市 | 新田場7号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | 2本1組 | 5-1,6-8 | [面高・長津1991] |
| | | | 圭頭(A) | | | 6-7 | |
| | | | 圭頭(A) | ◎, | 2本1組 | 7-7 | |
| 宮崎県 | 小林市 | 下の平2号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組 | 6-9 | [小林市教委1993] |
| | | | 圭頭(B) | | | 5-9,6-10 | |
| 宮崎県 | 小林市 | 東二原6号地下式横穴墓 | 変形圭頭 | | 2本1組 | 6-17 | [小林市教委1993] |
| | | | 変形圭頭 | | | 6-18 | |
| 宮崎県 | 小林市 | 東二原7号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | | [小林市教委1993] |
| 宮崎県 | 都城市 | 菓子野2号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | 5-6 | [矢部1993] |
| 宮崎県 | 都城市 | 牧ノ原17号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | 5-3 | [栗原1993] |
| 宮崎県 | 高原町 | 旭台9号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組 | 5-4 | [石川ほか1977] |
| | | | 圭頭(B) | | | 5-5 | |
| | | | 柳葉(二段逆刺) | ◎ | | [石川ほか1977] | |
| 宮崎県 | 高原町 | 旭台11号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | | [石川ほか1977] |
| 宮崎県 | 高原町 | 旭台13号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | 5-7 | [石川ほか1977] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切3号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組を含むか | 5-8,6-12 | [面高ほか1991] |
| | | | 圭頭(B) | | | 6-13 | |
| | | | 圭頭(B) | | | 5-10,6-14 | |
| | | | 圭頭(B) | | | | |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切6号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | 2本1組を含むか | 5-2 | [面高ほか1991] |
| | | | 圭頭(B) | | | | |
| | | | 圭頭(B) | | | | |
| | | | 圭頭(B) | | | | |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切54号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | | 6-5 | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切58号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | | | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切60号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | * | | 2-2 | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切61号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切63号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | | 6-6 | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 高原町 | 立切65号地下式横穴墓 | 圭頭(A) | | | | [面高ほか1991] |
| 宮崎県 | 野尻町 | 大萩10号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組か | 5-12 | [北郷編1984] |
| | | | 圭頭(B) | ◎, | | 7-8 | |
| 宮崎県 | 野尻町 | 大萩15号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | 5-13 | [北郷編1984] |
| 宮崎県 | 野尻町 | 大萩27号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | | 5-15,6-15 | [北郷編1984] |
| 宮崎県 | 高城町 | 牧ノ原1号木棺墓 | 圭頭(A) | | | | [近沢編2005] |
| 宮崎県 | 須木村 | 須木上ノ原9号地下式横穴墓 | 圭頭(B) | | 2本1組 | 5-14 | [岩永・茂山1981] |
| | | | 圭頭(B) | | | 5-11 | |
| 韓国 | 慶尚南道 | 咸安道項里(文)48号墳 | 大型定角 | ◎×2以上 | | 7-5 | [国立昌文研2000] |

凡例 圭頭(A): 圭頭式鉄鏃A類 圭頭(B): 圭頭式鉄鏃B類
 線刻の記号 | : 直線文 * : 交差文 ◎ : 円文 ○ : 円文(中心の点のみ見られないもの)
 文献の略称 教委: 教育委員会 国立昌文研: 国立昌原文化財研究所
 挿図番号は本稿に紹介したもの 例) 5-1: 図5-1 図5.6, 7に示した個体はすべて表示
 鏃身形態 柳葉式: 両刃, 鏃身部に角をもたないか, 鏃身部の茎寄りに角をもつもの
 二段逆刺鉄鏃: 柳葉式の一類型, 鏃身部に二段の逆刺をもつもの
 圭頭式: 両刃, 鏃身の先端部寄りに明確な角をもち, それより先端側に刃部をもつもの
 定角式: 両刃, 鏃身に角を持つ点は圭頭式と共通するが, 刃部が長い傾向をもつ
 小型のものは鏃身部に稜線をもつものがあり, 大型のものはふくらが発達する

号例，図7-5)などにみられる。また，大型定角式銅鏃として，石川県長坂二子塚古墳例(図7-4)が知られる。

このように，直線文と比べ，円文が施された鉄鏃の鏃身形態は多様であるが，平根系の特殊な形式にみられることが多い点は注目できる。円文は，特殊な鉄鏃とのかかわりが強い細工といえるだろう。

直線文をもつ線刻鉄鏃の変遷 直線文をもつ線刻鉄鏃は，古墳時代中期前葉において出現し，主に中期末葉まで製作されている。宮崎県立切54号地下式横穴墓例は，小型の圭頭式鉄鏃A類が主体となる鉄鏃組成をもち，中期前葉に位置づけられる。このほか，宮崎県新田場7号地下式横穴墓例〔面高・長津1991〕も古相の様相がみられるが，初現的な圭頭式鉄鏃B類が含まれる。中期前葉から中葉にかけての組成といえるだろう。宮崎県下の平2号地下式横穴墓例〔小林市教育委員会1993〕なども近似した段階のものと捉えられる。中期中葉以降，直線文をもつ線刻鉄鏃は圭頭式鉄鏃B類に多くみられるようになり，古墳時代中期末葉まで存続している。宮崎県内の古墳時代中期の圭頭式鉄鏃は時期が新しくなるほど，切先の角度が鋭利になる傾向があり，鏃身部も細長く頸部が軸状を呈するようになる。中期末葉の資料として，宮崎県島内55号地下式横穴墓例〔中野2001〕や宮崎県春姫登横穴墓例〔田尻・永友1989〕などがあげられる。

形態の変容が顕著な事例として，宮崎県東二原6号地下式横穴墓例〔小林市教育委員会1993〕がある。この個体は，刃部が大きく伸長化し，鏃身関の突出も著しい。製作時期の明確な位置づけは難しいが，本例は，直線文をもつ線刻鉄鏃と圭頭式鉄鏃の規範が弛緩した段階のものと捉えられよう。東二原6号地下式横穴墓例は，中期末葉もしくは後期前半まで降る可能性がある。

円文をもつ線刻鉄鏃の変遷 円文をもつ鉄鏃の最古例は，愛媛県朝日谷2号墳出土品である。朝日谷2号墳例は，有稜系〔松本1991〕の定角式鉄鏃であり，その製作時期は，古墳時代前期初頭にさかのぼる。古墳時代前期の有稜系の定角式鉄鏃は，地域首長の連携を示すものとして，全国の有力古墳に副葬されている。とくに，瀬

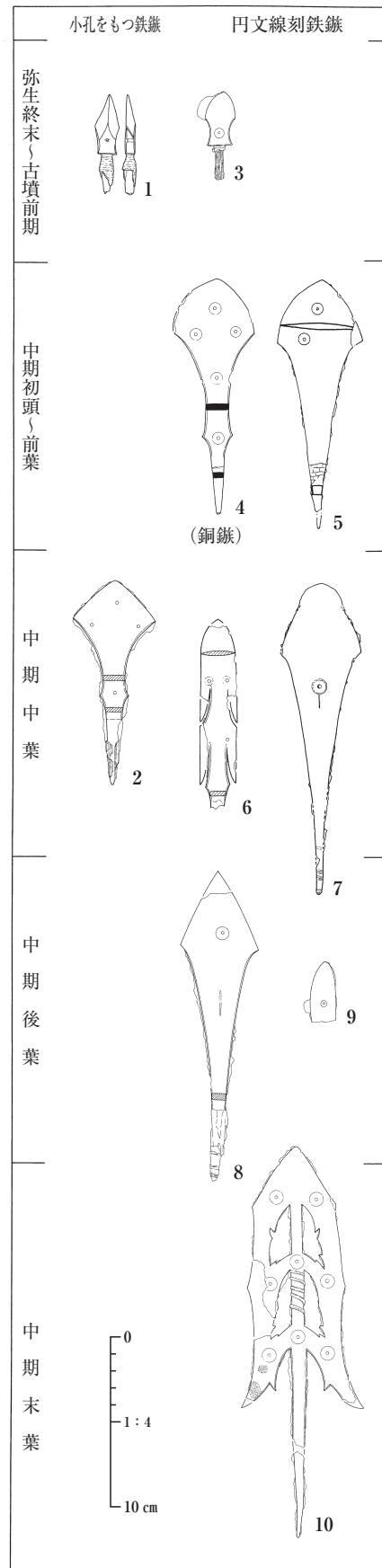


図7 円文をもつ線刻鉄鏃の変遷

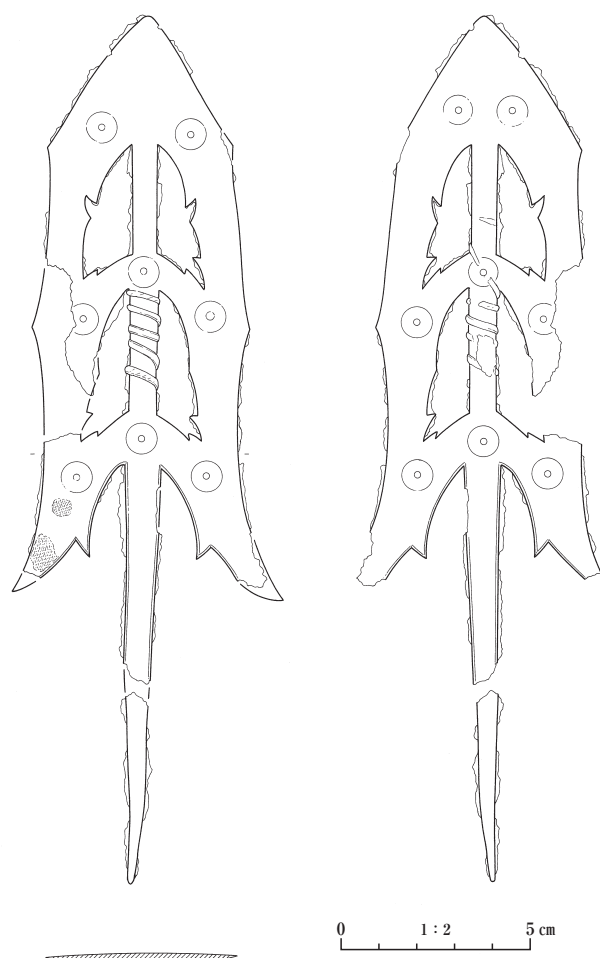


図8 高塚1号横穴墓出土鉄鏃

宮崎県内から出土する古墳時代中期の圭頭式鉄鏃にも円文が加えられる場合もある。宮崎県新田場7号地下式横穴墓例にみるように、ほとんどの事例が直線文と組み合わせるものである。円文をもつ圭頭式鉄鏃は、実用機能からかけ離れた大型のものが多いことから、上述するように、特殊な矢鏃として用いられたとみてよいだろう。

円文と儀仗性が強い矢鏃との関係を象徴的に示す資料が古墳時代中期末葉に位置づけられる熊本県高塚1号横穴墓例〔野田1989〕(図8)である。高塚1号横穴墓例は、鏃身長15cmを超える超大型の鉄鏃で、4箇所の透孔をもつ。透孔には、小さな逆刺状の突起や切り込みが認められ、複雑な外形線を描いている。また、中軸には直径1mm以上の太い繊維が巻き付けられている。この繊維の巻きつけは、根挟みや、矢柄などを装着するためのものではないことから、装飾的な性格が強いと捉えられる。繊維の巻きつけを螺旋の意匠と見立てれば、特殊な鉄器に見られる振りとの関連も考えられるだろう。この個体には、両面ともに8箇所にわたり円文が施されている。高塚1号横穴墓例にみられる多くの特殊な属性をふまえれば、円文の線刻は儀仗性を際立たせるための細工の一つと捉える視点がより鮮明になるだろう。

直線文の系譜 直線文は、鉄鏃の中軸線上の茎寄りの位置に刻まれる場合がほとんどである。

戸内地域から畿内地域にかけて分布が集中することから、形態の創出、鉄鏃の生産、流通に、同地域がかかわった可能性が指摘され〔松木1991、村上1998〕、その配布分配行為に初期倭王権の政治的営為を読みとることができる。こうした有稜系定角式鉄鏃の性格をふまえると、鉄鏃に刻まれた円文は、威信財としての特殊性を際立たせるための細工であったとも捉えられよう。

このほか、円文をもつ鉄鏃は古墳時代中期の事例が多い。表1にあげた事例が示すとおり、存続期間も古墳時代中期初頭から中期末葉にわたる。とくに、古墳時代中期の特徴的な鉄鏃として知られる二段逆刺鉄鏃や大型定角式鉄鏃において円文が確認できる点は重要である。大阪府アリ山古墳〔藤ほか1964〕の北施設において、この2形式に限り1500点以上が出土していることから知られるように、通有の鉄鏃⁽³⁾とは異なる儀仗性の強い矢鏃という認識があったことがうかがえる。

この施文位置と直接的な関係が見出せるものが単孔の透孔鉄鏃〔大澤2006〕である。透孔鉄鏃（以下、本稿で「透孔鉄鏃」という場合、単孔のものをさす）は、弥生時代後期、北部九州において出現した。透孔鉄鏃はほどなくして朝鮮半島南部にも拡散し、古墳時代前期前半においては宮崎県川床C141土坑墓例〔新富町教育委員会1986〕（図6-2）にみられるように、南部九州にも出土例が知られる。鉄鏃に施された透孔は、実用的な要素が希薄であり、特定地域の中で発達した象徴的要素を際立たせる装飾の一種と評価できる。透孔鉄鏃の鏃身形態には柳葉式のほかに、圭頭式、定角式などが知られているが、透孔鉄鏃が集中する豊前地域では柳葉式との関連が強い。

宮崎県川床C141土坑墓から出土した透孔鉄鏃〔戸高1995〕は、直線文をもつ線刻鉄鏃との関連が見出せる点で重要である。川床C141土坑墓例にみられる透孔は、かろうじて表裏が貫通しているものの、その幅は非常に狭く、外見上は線刻鉄鏃と大きな差異が認められない。透孔の設定位置は鏃身部でも茎に近い位置であり、線刻鉄鏃と共通する。線刻鉄鏃の直線文は、基本的に鉄鏃の両面に施されることも重要である。鏃を強く打ち付けて表裏を貫通させれば透孔になり、貫通させなければ線刻になるという差があるが、川床C141土坑墓例と線刻鉄鏃の間には、外見的に大きな違いはない。直線文の線刻鉄鏃が出現する前段階の宮崎県内において、形状的に関連が高い鉄鏃が知られることは注目できるだろう。

透孔鉄鏃の鏃身形態にかんしては、川床C141土坑墓例のような柳葉式のほかに、圭頭式も関連が強い。直線文をもつ線刻鉄鏃が、圭頭式にほぼ限定できることと共通性があるといえよう。川床C141土坑墓例に限らず、透孔鉄鏃の中には透孔が線状となるものが多く知られる。透孔と線刻の設定位置も共通している。このように、透孔鉄鏃の拡散過程や、特定の鏃身形態との関連、透孔鉄鏃と直線文をもつ線刻鉄鏃との形態的な共通点などをふまえると、線刻鉄鏃の直線文は、透孔を表現することに起源があったと捉えられる。

交差文の評価 鏃身部に施される交差文については、事例が限定されるため、詳細な系譜関係を論じることが難しい。交差文をもつ線刻鉄鏃は直線文をもつ線刻鉄鏃と同様に圭頭式であること、線刻位置が直線文と同様の鏃身部中軸上であること、交差文をもつ線刻鉄鏃を出土した宮崎県立切地下式横穴墓群からは多くの直線文をもつ線刻鉄鏃が出土していることなどから、交差文は南九州で発達した直線文の亜種として捉えることが許されよう。

円文の系譜 円文については、線刻が施された位置から判断して、直線文とは異なる装飾の意図が働いていたとみられる。円文は、鏃身部の比較的広範囲に設定される傾向があり、小孔が穿たれた鉄鏃〔岩井2006〕との関連を考慮すべきである。鉄鏃に穿たれた小孔は、矢柄装着のための実用的な役割を果たすものもあるが、小孔が鏃身中央に一箇所みられるものや、中軸上や左右対称の位置に複数箇所みられるものが知られ、非実用的な装飾であったことが知られる〔鈴木2004〕。

古墳時代中期の二段逆刺鉄鏃や大型定角式鉄鏃には、線刻鉄鏃の円文と同じ位置に小孔をもつものが多く知られることから、円文と小孔は、本来的には共通の意味をもつ意匠であったとみられる。線刻が確認できる条件は、資料の遺存状態に左右されることを考えると、小孔をもつ鉄鏃の中には円文が施されていた個体が含まれる可能性があるだろう。

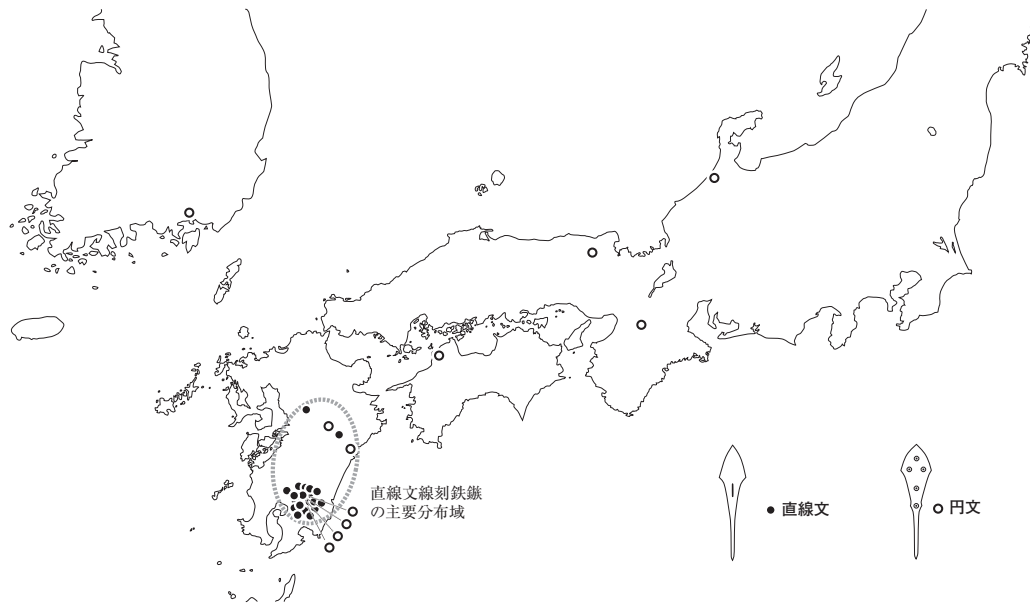


図9 線刻鉄鏃の分布

④……………線刻鉄鏃の象徴性

出土地の傾向 直線文をもつ線刻鉄鏃の出土地は宮崎県域、とくに宮崎県南部地域に集中し、その帰属時期は、ほぼ古墳時代中期に限定できる。直線文と関連がある透孔鉄鏃は弥生時代後期に北部九州において出現し、周辺地域に拡散する。時期的には、透孔鉄鏃と直線文をもつ線刻鉄鏃の連続性を認めて矛盾はないだろう。直線文をもつ線刻鉄鏃は、九州の地域的特性を示す圭頭式がほとんどで、その中には、宮崎県における独自の形態である圭頭式鉄鏃B類が多い点も留意したい。宮崎県内の線刻鉄鏃は、地域内で生産されていたと考えてよい。直線文をもつ線刻鉄鏃は、宮崎県における地域的特性の一つで、他地域への拡散傾向は積極的に見出しにくい。

これに対し、円文をもつ線刻鉄鏃(銅鏃)は、古墳時代中期のみならず、古墳時代前期にさかのぼり、出土地も畿内をはじめ、北近畿、北陸、瀬戸内、中・南九州、朝鮮半島南部と広域である。分布の核が見出せず、日本列島の西部に広がる点は、直線文をもつ線刻鉄鏃と大きく異なる。鏃身形態も多様で、二段逆刺鉄鏃や大型定角式鉄鏃など倭王権中枢と関連が強い鉄鏃だけでなく、熊本県高塚1号横穴墓例や圭頭式鉄鏃B類など、地域生産されたと捉えてもよいものにも円文がみられる。このことから、円文をもつ線刻鉄鏃は、畿内など特定地域で集中生産されたものが流通したと捉えるより、円文を施す技術が多地域に拡散していると捉えたほうが妥当である。

なお、朝鮮半島南部で円文をもつ線刻鉄鏃が確認されている咸安道項里〈文〉48号墳では、倭系鉄鏃と捉えられる鳥舌鏃〔鈴木2003〕もまともに出土している。線刻鉄鏃は倭から搬入された可能性があるかと捉えられよう。

2本一組の組合せ 線刻鉄鏃には、2本一組で副葬された可能性がうかがえるものが少なからず認められる。表1に示したように、2本一組で用いる事例は、直線文をもつ線刻鉄鏃に顕著なよ

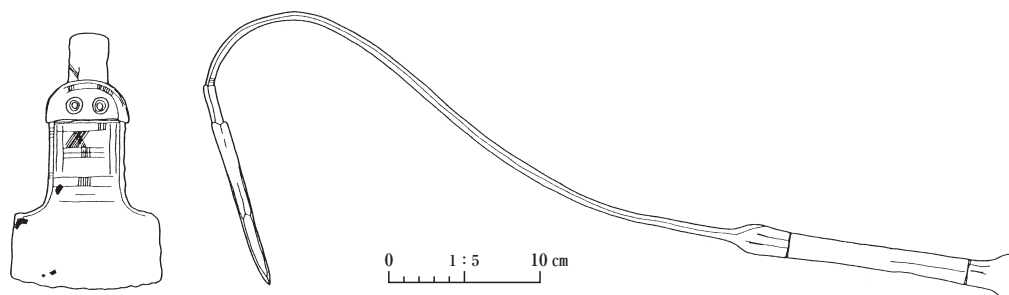


図10 大丸山古墳出土鉄柄斧

うである。熊本県マロ塚古墳例においても、完全な副葬鉄鏃の組成は明らかになっているといえないが、直線文をもつ線刻鉄鏃が2点出土しており、2本一組で用いられたと捉えても矛盾はない。儀仗性の強い鉄鏃が2本一組にされることは、弥生時代からつづく伝統的な使用方法であり、北部九州に起源がある透孔鉄鏃においても広く認められる [大澤 2006]。直線文をもつ線刻鉄鏃の起源として透孔鉄鏃を想定する解釈の妥当性を示すものといえるだろう。

図像としての円文 円文をもつ線刻鉄鏃は、小孔を穿った鉄鏃との関連を指摘したが、図像としては両者に若干の飛躍があることも認めなくてはならない。以下、若干の関連資料から、円文の意味について、検討しておきたい。

線刻鉄鏃における円文との関連を示すものとして、山梨県大丸山古墳から出土した鉄製柄付手斧(鉄柄斧) [宮沢 1989] に注目しておこう。この資料は、非常に精巧な造りで、刃先と柄に精巧な模様が刻まれている。斧の両面には、円文のほかに、平行線文、斜格子文(三角文)といった模様が施されている。施文技術は線刻鉄鏃のそれと同一で、表面に刻まれた模様は、鉄柄斧という儀器の特殊性を強調するための細工と捉えてよい。大丸山古墳から出土した鉄柄斧は精巧な細工から、朝鮮半島製である可能性も指摘されているが、この資料から、鉄製儀器に施された線刻模様の多様性をうかがうことができる。

円文や平行線文、斜格子文(三角文)は、加飾した土器や埴輪、装飾古墳などにも多用され、装飾模様として古墳時代には一般的な図文であったといえる。線刻鉄鏃における円文の意味を直裁的に示すことは難しいが、鉄鏃がもつ装飾的要素を高める意図があったことは、充分首肯できるだろう。

武器と円文の親縁性 円文と武器(武具)との親縁性を示すものが、装飾古墳における両者のあり方である。熊本県千金甲1号墳 [三島 1984] をはじめ、熊本県小田良古墳 [江本編 1979]、熊本

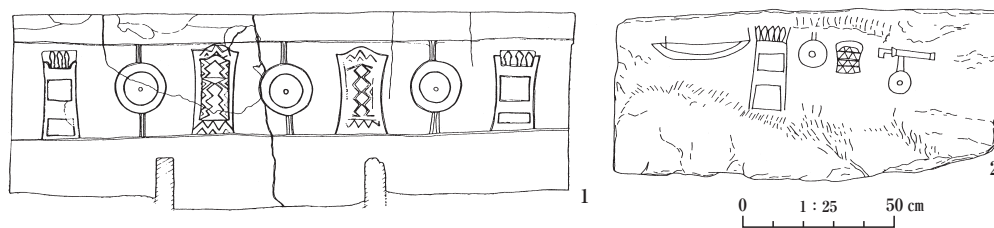


図11 装飾古墳にみる円文と武具

1. 小田良古墳 2. 大蔵東麓1号墳

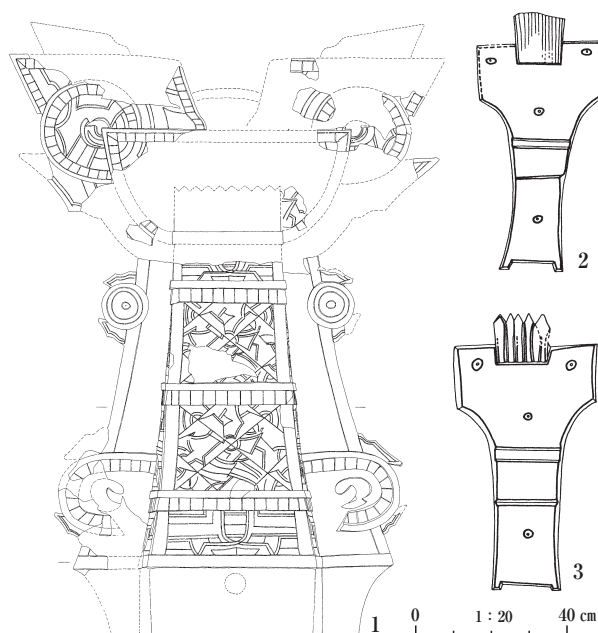


図12 装飾をもつ靱

1. 萱振1号墳 2・3. 大村11号横穴墓

注視すべき特徴といえる。靱の付属品という点では、熊本県大村11号横穴墓〔高木1984〕にみられる靱の浮き彫りにも、数箇所にもわたり何らかの装飾を取り付けた金具の痕跡が認められる〔高木2009〕。この事例は古墳時代後期以降のものであるが、靱と装飾品の関連を示す造形物として捉えることができるだろう。

鉄鏃に円文が刻まれる意味も、上に示したような図像どうしの関連を介在させると理解しやすい。鉄鏃に刻まれた円文は、武器や武具がもつ聖性や辟邪の能力を高める呪術的な模様として認識されていた可能性があり、その認識を共有する地域も、南九州から東北にわたる広がりをもっていた可能性が考えられる。

⑤……………結 語

本稿を締めくくるにあたり、マロ塚古墳出土の線刻鉄鏃について評価を下しておこう。マロ塚古墳例は、鏃身関が突出せず、西日本の広域に認められるとした圭頭式鉄鏃A類に属すが、北部九州や本州において類似した形態を探すことも難しい。マロ塚古墳出土の線刻鉄鏃は遠方から搬入されたものではなく、近隣地域で製作されたことを示しているだろう。切先が急角度になっていることから、この資料が古墳時代中期後葉から末葉にかけてのものであることが知られる。この段階に知られる線刻鉄鏃の多くは、南九州に特徴的な圭頭式鉄鏃B類であることは看過できない。圭頭式鉄鏃A類であるマロ塚古墳例は、圭頭式鉄鏃B類の製作地とみなせる南九州とは異なる地で製作された可能性も考えられるだろう。⁽⁵⁾

直線文をもつ線刻鉄鏃は、近畿地方中枢部に分布の中心がある威信財のように、広域流通しない

県大鼠蔵東麓1号墳〔江川1984〕など、古墳時代中期の石障や石棺に表現された装飾には、円文⁽⁴⁾と武器・武具がしばしば同一箇所に表示されている。被葬者を取り囲む呪術的な造形として円文と武器・武具が選択されているといえよう。

また、靱を象った造形にも、円文が施された事例が散見できる。山形県菅沢2号墳〔江川・藤沢編1991〕や、大阪府萱振1号墳〔広瀬編1992〕、兵庫県行者塚古墳〔菱田・高橋ほか1997〕などから出土した靱形埴輪には、鱗状の装飾部分に円文がみられる。靱形埴輪にみられる円文は、実物の靱に取り付けられた装飾品を象った可能性があり、武具と円文の関連性を探る上でも

傾向が強い。基本的には地域内で生産され、地域内で消費されたものといえる。こうした特徴的な生産と流通の特性から、直線文をもつ線刻鉄鏃を用いることに、地域的な紐帯を読み取ることができ。マロ塚古墳例の確認によって、直線文をもつ線刻鉄鏃の分布が宮崎県内にとどまらず、熊本県域まで広がることが明らかになった。宮崎県域との関連を示す儀礼用具が含まれることに、被葬者の性格の一端が示されているといえるだろう。マロ塚古墳の被葬者は、豊富な甲冑や長頸鏃に示される王権中枢との関係とともに、南九州との地域的なつながりも密接にもっていたことが知られる。

以上、マロ塚古墳で確認された線刻鉄鏃の評価に端を発し、鉄鏃に施された線刻の分類や系譜について触れてきた。線刻鉄鏃の基本図像である直線文と円文は、本来は異なる象徴的意味を有していたと捉えられ、存続時期や分布範囲にも差異がある。直線文をもつ線刻鉄鏃は、弥生時代後期に出現する透孔鉄鏃に祖形が求められ、古墳時代中期の宮崎県域で主に用いられた。いっぽう、円文は、武器や武具をもつ聖性や辟邪の能力を高める呪術的な図像として認識されていた可能性があり、鉄鏃への線刻例も、古墳時代前期から中期にかけて知られている。小孔を穿つ鉄鏃との関連も考慮すべきで、その分布範囲も、直線文をもつ線刻鉄鏃と比べ広域である。ただし、直線文も円文も、古墳時代中期を中心に儀仗性の高い矢鏃に施されているという共通性は認めてよい。宮崎県内の圭頭式鉄鏃にみるように、両者の混交現象も認められる。

膨大な古墳時代の鉄鏃の中で、線刻鉄鏃の数は非常に限定的であるといわざるをえない。しかし、限定的な特殊例に表出される要素こそ、鉄鏃の象徴的側面を探るために欠かせない特質が表出していることを強調しておきたい。

【謝辞】

本稿をなすにあたり、資料調査等で以下の方々、機関にお世話になった。その名を記し、謝意を表したい。

東 憲章、池田朋生、戸高真知子、野田拓治、高森町教育委員会、宮崎県埋蔵文化財センター、西都原考古博物館、延岡市教育委員会

註

(1)——このほか、宮崎県島内地下式4号横穴墓から出土した片刃鏃〔岩永1993〕において、軸状の頸部の茎寄りに交差文が確認できる。線刻鉄鏃のほとんどが鏃身に彫刻が施されることにに対し、この事例は頸部に施されるという大きな差異がある。平根系鉄鏃にみる交差文と関連をもち、線刻が多用される南九州の地域性の中で細根系鉄鏃にも線刻が施されたとみられる。こうした事例が示すように、南九州では今まで存在が確認できないような位置に線刻を施す事例が今後も発見される可能性がある。

(2)——圭頭式鉄鏃B類の多くは刃部が急角度（切先の角度が概ね60°以下）であることも特徴である。

(3)——多くの器物は、実用性と非実用性（象徴性）の

双方の性格を併せもつ。武器の攻撃機能から整理するならば、これらの性格は、兵仗性と儀仗性という観点に置き換えることができるだろう。攻撃機能とはかかわらない非実用的要素（象徴的要素）が認められる武器の場合、「儀仗性」が強いと評価することができる。

(4)——円文によって表現される具体的な器物としては、鏡が第一候補として考えられる。しかし、本文中にあげた装飾古墳の事例からは、円文と鏡を完全に同一視することは難しい。円文は、鏡のほかにも日輪や的などを象徴的に象ったものと解釈されることがあるが、本稿では、円文を具体的な器物を示すものではなく、抽象化を経た呪術的文様として捉えておきたい。

(5)——マロ塚古墳から出土した線刻鉄鏃の具体的な製

作地を明言することは難しいが、その候補地として、マロ塚古墳が築造された熊本県域、もしくは、圭頭式鉄鍬B類の中心地から外れる宮崎県北部をあげておきたい。また、線刻鉄鍬の意義を考えるにあたり、遺存状態の差異は留意すべき問題である。南九州に線刻鉄鍬が多いことの理由として、地下式横穴墓という良好な遺存状態を保つ遺構からの出土品が多数を占めることが考えられ

る。熊本県や福岡県などから出土する圭頭式鉄鍬は南九州の出土資料と比べると遺存状態が悪く、線刻があっても確認できない事例が含まれる可能性がある。今後の詳細な資料検討、遺存状態のよい事例の増加によって、直線文の線刻をもつ圭頭式鉄鍬の分布がさらに広がる余地が残される。

引用・参考文献

[日本文献]

- 石川恒太郎ほか 1977『宮崎県文化財調査報告書』第19集 宮崎県教育委員会
- 岩井顕彦 2006「有孔鉄鍬からみた古墳副葬鉄鍬の系譜」『考古学研究』第53巻第2号 考古学研究会 pp.54-72
- 岩永哲夫 1993「島内地下式横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県 pp.810-816
- 岩永哲夫・茂山護 1981『宮崎県文化財調査報告書』第23集 宮崎県教育委員会
- 梅木謙一 2002「愛媛最古の前方後円墳 朝日谷2号墳」『えひめ発掘物語』愛媛県歴史文化博物館 pp.59-62
- 梅木謙一編 1998『朝日谷2号墳』松山市文化財調査報告書 第63集 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・村上恭通 2001「刻印を有する定角式鉄鍬と古墳副葬鉄鍬の発生」『日本考古学協会第67回(2001年度)総会研究発表要旨』日本考古学協会 pp.88-91
- 江川隆・藤沢敦編 1991『菅沢2号墳』山形市教育委員会
- 江川敏勝 1984「大鼠蔵東麓1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書 第68集 熊本県教育委員会 pp.165-166
- 江本 直編 1979『小田良古墳』三角町教育委員会
- 大澤元裕 2006「杏仁形透孔付鉄鍬の特徴と展開」『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会 pp.101-127
- 面高哲郎・永津宗重 1991『宮崎県文化財調査報告書』第34集 宮崎県教育委員会
- 面高哲郎ほか 1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調査報告書 第1集 高原町教育委員会
- 岸本一宏編 2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告 第383冊 兵庫県教育委員会
- 栗原文蔵 1993「下川東牧ノ原地下式横穴墓群」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県 pp.851-868
- 小林市教育委員会 1993『東二原地下式横穴墓群 下の平地地下式横穴墓群』小林市文化財調査報告書 第6集
- 小嶋芳孝 1978『金沢市長坂古墳群の研究』石川県立郷土資料館紀要 第9号 石川県立郷土資料館
- 茂山 護 1980「二段逆刺を有する鉄鍬について—地下式横穴出土鉄鍬集成覚書(1)—」『研究紀要 昭和54年度』宮崎県総合博物館 pp.3-20
- 茂山 護ほか 1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』宮崎県総合博物館
- 新富町教育委員会 1986『川床遺跡』新富町文化財調査報告書 第5集
- 末永雅雄 1930『円照寺墓山第一号古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第11冊 奈良県教育委員会
- 鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鉄鍬の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 pp.49-70
- 鈴木一有 2004「平根系鉄鍬の諸相」『古代武器研究』Vol.5 古代武器研究会 pp.36-46
- 鈴木 勉 2006「象嵌技術から見える古代の鉄技術」『復元七支刀—古代東アジアの鉄・象嵌・文字—』雄山閣 pp.218-243
- 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその評価」『古代』第63号
- 田尻隆介・永友良典 1989『陣内遺跡 丸山遺跡 春姫登横穴墓』高千穂町文化財調査報告書 第8集 高千穂町教育委員会
- 高木正文 1984「大村横穴墓群」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書 第68集 熊本県教育委員会 pp.344-355
- 高木正文 2009「金具を取り付けた韃の浮彫がある横穴墓—熊本県人吉市大村11号横穴墓—」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会 pp.273-284

- 近沢恒典編 2005『牧ノ原遺跡群』高城町文化財調査報告書 第20集 高城町教育委員会
- 戸高眞知子 1989a「線刻のある鉄鏃について」『日本文化財科学会 第6回研究大会発表要旨』日本文化財科学会 pp.58-59
- 戸高眞知子 1989b「鉄鏃の特注品？ブランド品？」『宮崎考古 石川恒太郎先生米寿記念特集号 上巻』宮崎考古学会 p.74
- 戸高眞知子 1995「川床遺跡出土の線状孔のある鉄鏃」『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会 pp.60-61
- 中野和浩 2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第29集
- 野田拓治 1989『高塚横穴群の調査について』第194回 肥後考古学会例会資料
- 菱田哲郎・高橋克壽ほか 1997『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書 15 加古川市教育委員会
- 広瀬雅信編 1992『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書 第39輯 大阪府教育委員会
- 藤 直幹ほか 1964『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告 第1冊 大阪大学
- 北郷泰道編 1984『宮崎県文化財調査報告書』第27集 宮崎県教育委員会
- 松木武彦 1991「前期古墳副葬品の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会 pp.29-58
- 三島 格 1984「千金甲1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書 第68集 熊本県教育委員会 pp.83-85
- 宮沢公雄 1989「鉄製柄付手斧について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集 帝京大学山梨文化財研究所 pp.65-86
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 矢部喜多夫 1993「菓子野地下式横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県 pp.869-874
- 柳田康雄編 1996『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集 福岡県教育委員会
- 吉村和昭 1992『隼人一古墳時代の南九州と近畿』特別展図録 第39冊 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 和田理啓 2001「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓（第1分冊）』九州前方後円研究会 pp.607-621

[韓国文献]

- 国立昌原文化財研究所 2000『咸安道項里古墳群Ⅲ』学術調査報告 第8輯

図出典

- 図1 [末永1930]より引用
- 図2 [戸高1989a]を参考に、[吉村1992]より引用
- 図3 筆者作成
- 図4 すべて筆者原図
- 図5 すべて筆者原図、出土地は下記に示す
- 図6 1. [柳田編1996]
2. [戸高1995]
5・6・13. [面高ほか1991]
7. [面高・長津1991]
9・17・18. [小林市教育委員会1993]
16. [田尻・永友1989]より引用
上記以外は筆者原図 出土地は下記に示す
- 図7 1. [田中1977]
5. [国立昌原文化財調査研究所2000]
7. [吉村1992]より引用
3. [梅木2002]より写真トレース
上記以外は筆者原図 出土地は下記に示す
- 図8 筆者原図（高森町教育委員会所蔵、掲載許可届出済）、作図および実測図の本稿掲載にあたっては、野田拓治氏から多大なるご高配をいただいた
- 図9 筆者作成
- 図10 [宮沢1989]より一部改変のうえ引用
- 図11 1. [江本編1979]
2. [江川1984]より引用
- 図12 1 [広瀬編1992]
2・3. [高木1984]より引用
- 図5の出土地
1. 新田場7号地下式横穴墓
2. 立切6号地下式横穴墓
3. 牧ノ原17号地下式横穴墓
4・5. 旭台9号地下式横穴墓
6. 菓子野2号地下式横穴墓
7. 旭台13号地下式横穴墓
8・10. 立切3号地下式横穴墓
9. 下の平2号地下式横穴墓
11・14. 須木上ノ原9号地下式横穴墓
12. 大萩10号地下式横穴墓
13. 大萩15号地下式横穴墓
15. 大萩27号地下式横穴墓

図6の出土地

1. 徳永川ノ上IV-42号墓
2. 川床C141土坑墓
3. 龍門寺15号墳
4. 五ヶ山B2号墳
5. 立切54号地下式横穴墓
6. 立切63号地下式横穴墓
- 7・8. 新田場7号地下式横穴墓
- 9・10. 下の平2号地下式横穴墓
11. マロ塚古墳
- 12～14. 立切3号地下式横穴墓
15. 大萩27号地下式横穴墓
16. 春姫登横穴墓

17・18. 東二原6号地下式横穴墓

図7の出土地

1. 神門4号墳
2. 恵解山古墳
3. 朝日谷2号墳
4. 長坂二子塚古墳
5. 道項里〈文〉48号墳
6. 南方14号墳
7. 新田場7号地下式横穴墓
8. 大萩10号地下式横穴墓
9. 円照寺墓山1号墳
10. 高塚1号横穴墓

(浜松市文化財課, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)

The Lineage of Line-Engraved Iron Arrowheads

SUZUKI Kazunao

Iron arrowheads (*yajiri*) with line engravings (line-engraved iron arrowheads) are found in the *Marozuka* Tomb. The purpose of this study is to investigate the places of manufacture of the line-engraved iron arrowheads and their significance as grave goods. I collected Kofun Period line-engraved iron arrowheads, organized them into form-based categories, and examined their distribution, and transitions in that distribution.

The line engravings on the iron arrowheads can be broadly divided into two types: a line engraving consisting of only a single straight line, and circular patterns arranged in or around the central area. Both types of line-engraved iron arrowheads are related by being highly ceremonial, but arrowheads thought to be of the parent pattern are different, and there are differences in the periods of their manufacture and in their distribution.

Line-engraved iron arrowheads with the straight line pattern originate from the pierced iron arrowheads found in northern Kyushu from the late Yayoi period, and in the mid-Kofun Period are concentrated in the area of Miyazaki Prefecture (southern Kyushu). The single straight engraved line is conjectured to be (interpreted as) a regressed form of the earlier piercing. Iron arrowheads with the straight line engraving are mostly limited to the specific *keitō* (jade *gui*-tablet) style shaped arrowheads, and the range of distribution is also limited. The line-engraved iron arrowheads are treated as a local custom related to the specific grave style of underground *yokoana* (horizontal) graves, and are considered to have been produced locally and used locally.

On the other hand, even though examples of line-engraved iron arrowheads with circular patterns are common from the mid-Kofun Period, they had already appeared by the beginning of the early Kofun Period. There is a possibility that they are related to the late Yayoi Period iron arrowheads with small holes, but since the circular patterns tend to be applied to iron arrowheads that are highly ceremonial, the circular pattern is conjectured to be (interpreted as) as workmanship undertaken to emphasize that distinctiveness. Among preserved line-engraved iron arrowheads are circular patterns with a variety of shapes, including the *keiō* type, *jōyokaku* (chisel-pointed) type, *yanagiba* (willow leaf-shaped) type, *nidan-kaeri* (double barbed) type, and others. No central point of distribution can be discerned, and they are widely distributed, including on the Korean peninsula. The circular pattern

suggests that the iron arrowheads are closely related to the central royal government of Wa, but with strong manifestations, too, of local characteristics. I point out that the techniques and significance of applying the circular pattern were not limited to the royal Wa government, but may have been distributed throughout many localities.

Through the existence of the *Marozuka* Tomb line-engraved iron arrowheads, it was learned that the distribution of line-engraved iron arrowheads with the straight line pattern was not limited to Miyazaki Prefecture but also extended to the Kumamoto area. It is possible to detect local ties through the use of line-engraved iron arrowheads with the straight line pattern. This means that the burial goods of powerful headmen in the Kumamoto area included ceremonial items that demonstrated a relationship with the Miyazaki area. It is worth noting that this reveals one aspect of the personality of the person buried in the *Marozuka* Tomb.

Keywords: *Marozuka* Tomb, line-engraved iron arrowheads, ceremonial, relations between localities, fifth century